中世哲学は存在するか

文学部　哲学史講座　水田英實

中世哲学は存在するか。この問に対してどう答えるかということは、何をもって「中世哲学」と考えるかによって決まることは言うまでもない。もし中世哲学＝スコラ哲学＝似而非哲学という等式が成立するなら、哲学でないものに哲学という名前をつけているだけであって、真にこの名前で呼ばれるにふさわしいものは、存在していないと言わなければならない。しかしこの事情は何も中世哲学に限ったことではない。見解を異にする人たちは、互いに互いの主張を否定して、正しくないことを正しいと言っていると非難しあうものだからである。それではいま、ことさらこの点を問題にしなければならない理由があるとすれば、それは何か。

中間の時代

西欧近世初頭の人文主義者たちが初めて「中世」という呼称を造って用いたとき、それはかつて文化が栄えた時代と再び文化の隆盛を迎えたわれわれの時代という二つの光明の時代の「中間の時代」を意味していた。そのためにこの語には最初から、文字通りの意味に加えて暗黒時代という意味が付随することになったのである。しかもそれは特に西欧の中世を意味していた。むろん古代哲学と言えば普通ギリシア哲学を指す。その延長としてのローマ哲学を含むこともある。しかし、きわめて限られた地域の古代のことでしかない。近世哲学がデカルトからはじまると言われる場合も同様である。それは西欧の近世のことだからである。「西欧の」という限定が加わる点で中世哲学もよく似ている。否定するにしても賛美するにしても、それは西欧の中世に属することだからである。「西欧の」という限定は中世から意味を持つのである。

このような中世哲学を「キリスト教哲学」と特徴づけたのは、ジルソン（Etienne Gilson（一八八四～一九七八）である。これによれば思想史における「中世」は、キリスト教の出現とともに始まる。この見方はユーベルベクの『哲学史』とも一致する。このように見ることによって、紀元三世紀の新プラトン主義者プロティノスは、古代に属するけれども、同じ時期に同じ師から学んだオリゲネスは、中世に属するということが説明できるようになるのである。ジルソンのいうキリスト教哲学は、キリスト教と同様にイスラエルの宗教として成立した、キリスト教成立後のユダヤ教の思想やイスラム教の思想を排除したり無視したりする意図を持つものではない。西欧の近世哲学との関係からみて重要な役割を果たしたキリスト教を代表させているのである。そこでヘレニズムとヘブライズムの交渉という成立要因からみて、中世哲学は、フィロンからスピノザにいたるまでの宗教哲学であるととらえる人もいる。いずれにせよ、視野を広げて西欧の外も考慮にいれるならば、中世を暗黒時代とみる図式そのものが疑問視されるのである。

神の観念としてのイデア

ところでキリスト教哲学ないし宗教哲学としての中世哲学は、哲学と宗教の緊密な関係を抜きにしては成立しない。しかし理性と信仰の異質性を強調する点では同じであっても、両者を分離し不毛な関係しかないとみる立場に対して、理性が理性自身を変容させ信仰が信仰自身を変容させるところから、新たな協調が生まれるとみる立場もある。一九三〇年

代のいわゆるキリスト教哲学論争の論点はここにあったのである。ヘーゲルの『哲学史』が実証性を欠くことは、ヘーゲルの死後直ちに弟子たちによって指摘され、それを修正する作業が十九世紀から始まったけれども、古代哲学史と近世哲学史の分野に限られていた。中世哲学史がこの作業の対象になりえたのは、二十世紀以降のことでしかない。

その意味で中世哲学が新たに学問的研究の対象として関心を集めるようになったのはごく最近のことなのである。しかしその時期は、デカルトにとっての「われわれの時代」が、われわれ自身にとってはそうでなくなり、われわれがわれわれ自身の哲学を求めて近世哲学の克服を模索しはじめた時期と一致する。

中世哲学を担う理性にとって、たとえばそれが神を求める時、その神は真の神であるよりはむしろ真理そのものでなければならない。それはこの理性が求めるのは、ある人にとって真であるものでもなく、ある点で真のものでもないからである。むろんこのような理性は、さしあたりあくまでも中世哲学の担い手として見出されるのであって、それがそのままわれわれの時代の哲学の担い手であるわけではない。その意味で中世哲学研究は中世哲学史の研究である。しかしこの哲学史上の一つの時代において、『ヨハネ伝』のロゴスがギリシア哲学におけるロゴスに異質の意味を加えて新たな理性的思索の源泉となったのである。イデア論の歴史に新たな展開をもたらしたのもこの時代である。神の精神における観念としてのイデアが見出されたことによって、プラトンのいう実在としてのイデア（idea）から近世哲学における観念（idea）に移行する過程が明らかになる。そこに見出されるのは、先駆として評価される思想ではなく、思想史を理解する上で決定的に重要な意味を持つ、独自の内容のある思想だからである。

広島大学文学部西洋哲学教室は、哲学講座と哲学史講座からなり、それぞれ大学院における研究分野としての近世哲学史および古代中世哲学史の基礎講座になっている。今回紹介させていただいたのは、ここで行われている研究の一部である。

スコラ哲学の大成者トマス・アクィナスの筆跡（『対異教徒大全』の一部）